

## 2020.12.13 第二主日待降節Ⅲ礼拝

### ヨハネの黙示録5：9-14「ほふられた子羊への賛美」

#### 聖書

- 9 彼らは新しい歌を歌った。「あなたは、巻物を受け取り、封印を解くのにふさわしい方です。あなたは屠られて、すべての部族、言語、民族、国民の中から、あなたの血によって人々を神のために贖い、
- 10 私たちの神のために、彼らを王国とし、祭司とされました。彼らは地を治めるのです。」
- 11 また私は見た。そして御座と生き物と長老たちの周りに、多くの御使いたちの声を聞いた。その数は万の数万倍、千の数千倍であった。
- 12 彼らは大声で言った。「屠られた子羊は、力と富と知恵と勢いと誉れと栄光と賛美を受けるにふさわしい方です。」
- 13 また私は、天と地と地の下と海にいるすべての造られたもの、それらの中にあるすべてのものがこう言うのを聞いた。「御座に着いておられる方と子羊に、賛美と誉れと栄光と力が世々限りなくあるように。」
- 14 すると、四つの生き物は「アーメン」と言い、長老たちはひれ伏して礼拝した。

#### はじめに

待降節第3主日の朝を迎えました。いよいよ次主日はクリスマス礼拝です。今年のクリスマス礼拝は賛美を中心にした礼拝です。2020年の教会標語「神に向かって歌う」にふさわしい礼拝として心いっぱい賛美をささげましょう。先週のザカリヤのお話を覚えておられるでしょうか。解かれた口で神さまを賛美したザカリヤに倣い歩みましょうとお話しました。先週私たちの口は何を語ったでしょうか。神さまをほめたたえ感謝するためにささげられたでしょうか。人々を建て上げ希望を持って歩むためにささげられたでしょうか。皆さんに問う前に私自身が神さまから「お前はどうか」と問われました。正直主の前に悔い改めなければならない現実があることを認め、礼拝

の前に主の赦しを祈りました。イエスさまは私の祈りを受け止め、赦しをもってこの礼拝に迎えてくださったのです。私たちが地上にある間は、イエスさまの十字架の赦しから離れて生きることはできません。常に私たちは十字架の赦しを仰ぎ、赦されて生きているのです。

でも、やがて赦しのために十字架を仰ぐ日も終わります。その日私たちは地上の旅を終えて天の御国に帰るのです。そこで待っているのは永遠に尽きることのない賛美です。

### 1. 主をほめたたえよ

クリスマスの時期になるとヘンデルの「メサイア」を耳にすることが多くあります。来週のクリスマス礼拝の中で、私たちもハレルヤコーラスをささげます。メサイアの中で特にハレルヤコーラスが有名ですが、最後のアーメンコーラスも感動します。皆さん、アーメンコーラスの直前に歌われている歌詞をご存知でしょうか。今からその部分のCDを流しますので、少し耳を傾けてください（メサイア 53 番）。

今聞いて頂いたのはメサイアの第 53 番です。この後第 54 番アーメンコーラスで締め括られます（曲番の付け方には幾つかあるようですが）。53 番で賛美されている内容が今日の聖書箇所そのものです。「屠られた子羊は、力と富と知恵と勢いと誉れと栄光と賛美を受けるにふさわしい方です。」（12 節）、「御座に着いておられる方と子羊に、賛美と誉れと栄光と力が世々限りなくあるように。」（13 節）とイエスさまをほめたたえています。9 節の「あなたは屠（ほふ）られて…あなたの血によって人々を神のために贖い…」というイエスさまの十字架の贖いもコーラスの中で賛美されています。皆さんはどのような思いでお聞きになりましたか。神の国での賛美に自分がいることを想像できたでしょうか。もしそれを想像することができたなら、今日の礼拝の目的は果たされたと言ってもよいほどです。キリストの十字架の贖いを通して私たちは確かにこの賛美の中にいるのです。すでに天に帰った人たちと一緒に。

### 2.3 重の賛美の輪

ヨハネの黙示録は新約聖書の最後の書であるだけでなく、旧約・新約を合わせた聖書の最後の書です。そこには救いの完成として新しい天と地という神の国の完成図が黙示文学の表現で記されています。黙示文学とは隠されていた世界、すなわち将来起こる世の終わりと天上の世界について書かれたもので、難解な表現で記されています。4章から黙示的な表現になっていきませんが、5章で賛美がささげられている様子をイメージとして描くと、中央に神・小羊の御座があり、その周りに4つの不思議な生き物（黙示録4:6-8）がいて、それを取り囲むように24人の長老がいます。そしてその長老の更に一回り外に「万の数万倍、千の数千倍」（11節）というおびただしい御使いが存在しています。

今日取り上げた箇所は3重の賛美から成っています。一番内側の賛美は9,10節で4つの生き物と24人の長老の賛美です。その一回り外の賛美が11,12節で御使いたちの賛美です。そして一番外側の賛美が13,14章で全被造物（神さまによって造られたすべてのもの）の賛美になります。そしてこれらの賛美を受けるにふさわしい方が中央におられる子羊です。この子羊がご自分の血によって私たちを救ってくださったイエスさまです。地上の礼拝は天での礼拝に繋がっていますので、私たちは毎週子羊であるイエスさまを賛美し礼拝しているのです。その意味で礼拝とはキリストの前にひれ伏し、賛美をささげる極めて宗教的なものです。ただし、極めて宗教的であることと閉鎖的であることとは違います。もし閉鎖的であるなら、礼拝に与れるのはキリストの血によって贖われた信者だけになります。しかし礼拝は信者だけのものではありません。すべての造られた者のためにあります。なぜなら人は一人として漏れることなく、神さまに創造された極めて宗教的な存在だからです。先ほどの3重の賛美のイメージで言うなら、最も外側の輪には全被造物が招かれており、太陽も星も動物も植物もあらゆるものがキリストを賛美するわけです。この大賛美の中に私たち一人一人も組み込まれており、今日の礼拝でその恵みの前味わいをしているわけです。

### 3. 新しい歌をささげよう

神さまは私たちに賛美の唇を与えてくださいました。その賛美は日々新しい賛美です。聖書は私たちに約束しています。「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました」(Ⅱコリント5:17)。キリストにあって新しい者に変えられた一人一人は、常にキリストの十字架に対して新しい感謝と新しい歌をささげるのです。私たちはなぜ毎週礼拝をささげるのでしょうか。なぜ時々ではいけないのでしょうか。気が向いた時に礼拝すればよいではないかという意見があるかもしれません。しかし、時々や気が向いた時では、新しさを保つことは難しいでしょう。もちろん様々な事情があって時々しか礼拝に集えないこともあります。でもご自分の置かれた場所で心から礼拝をささげることはできますから、そこで新しい歌を主にささげて頂きたいと願います。

私たちの新しさはイエスさまの十字架と復活に対する新しさです。罪の贖いの十字架に感謝して、勝利のしるしである復活に望みをおいて、賛美の道を歩み続けていきましょう。教会福音讃美歌 402 の歌詞に「主にすがるわれに／悩みはなし／十字架のみもとに／荷をおろせば／うたいつつあゆまん／ハレルヤ！ハレルヤ！／うたいつつあゆまん／この世の旅路を」とあります。十字架の下に重荷を降ろし、歌いつつこの世の旅路を歩むなら、やがて約束された天での大賛美に加えられることでしょう。そのためにも私たちの救い主であるイエスさまをいつも仰ぎ見て生きる者でありたいと願います。

### まとめ

私たちの口からいつも賛美が溢れますようにお祈りします。ご一緒に詩篇 96 篇を読んでメッセージを締め括りましょう。「新しい歌を主に歌え。全地よ 主に歌え。主に歌え。御名をほめたたえよ。日から日へと御救いの良い知らせを告げよ。主の栄光を国々の間で語り告げよ。その奇しいみわざをあ

らゆる民の間で。まことに主は大いなる方 大いに賛美される方。すべての神々にまさって恐れられる方だ。」(1-4 節)、「もろもろの民の諸族よ 主に帰せよ。栄光と力を主に帰せよ。御名の栄光を主に帰せよ。ささげ物を携えて主の大庭に入れ。聖なる装いをして主にひれ伏せ。全地よ 主の御前におののけ。」(7-9 節)。

間もなくクリスマスを迎えます。この方は私たちの救い主としておいで下さいました。私たちに救いをもたらし、やがて天の大賛美に迎えるために地上に来てくださったのです。賛美をささげるにふさわしい方としてイエスを仰ぎ見るクリスマスとさせて頂きましょう。